

四月三日（月）

先に車を降りていた芽衣に映美を任せ、僕はチャイルドシートの中で眠る亜衣を抱えて車のキーをロックした。遮光カーテンを下ろし忘れた家の中から、煌々と光が漏れる。

胸の中の娘が起きないように、そつと家の中に入り、寝室の子供用ベッドに寝かせる。僕たちのベッドには、同じように映美が寝息を立てていた。階下からは、芽衣がせつせと戸締りやら明日の支度やらを進めている音が聞こえてくる。寝室のドアをそつと閉めて、リビングへ降りていく。

壁にかけて時計を見ると、午後十時を過ぎていた。当初の想定より二時間も遅れている。妻は部屋干ししていた洗濯物を畳み終えていた。

「ゴメンね、任せつきりね」

「亜衣は？」

「しつかり寝てる。無理言っつて、お風呂入れてもらっつて正解だったね」

芽衣は肩をすくめ、脱衣所へタオルを持って行った。お風呂にお湯を張るスイッチも入れてくれたようだ。二人の娘は義父さんに入ったけど、僕らの入浴はこれからだ。妻はバタバタしっぱなしで、自分がお風呂に入る支度もテキパキと進めていく。それをジツと見ていると「あなたが先に入る？」と訊いてきた。首を振ると、寝巻きの準備やらタオルの準備やらを進めていく。

僕はキッチンで手を洗い、半ば無意識に冷蔵庫を開けた。

「ビールは一番上、ドアポケットの方じゃなくて奥の方が冷えてるよ」

芽衣は髪を縛っていたゴムを外し、髪を振り解きながら、グラスの場所を指差した。

「芽衣も飲む？」

彼女は給湯器の画面に視線をやり、「いいの？」と言った。

「しつかり冷えてるのは、それしかないけど」

「二人でゆっくり飲めるなら、別にいいさ」

彼女は「じゃあ、お風呂が湧くまで」と条件を付け足し、自分のグラスを持って食卓についた。僕はできるだけ均等になるようグラスに注いだが、泡まで綺麗

にとは行かなかった。軽くグラスを合わせ、一緒にグツと飲んだ。義実家では見
てるしかなかったビールが、全身に染み渡る。

「なんか、おつまみ出す？」

芽衣が椅子に手をかけたが、「いいよ。コレだけでいい」と座るように促した。
僕の隣で、ただビールを飲んでいるのが落ち着かないようだ。微妙にソワソワし
ながらグラスを傾けている。僕はそれを見て、笑ってしまった。芽衣は「何よ
？」とささやかに語気を強めた。

「いや、ゴメンゴメン。任せつきりにならないようにしてたつもりだけど、つも
りでしかなかったなあ、と思つてね」

僕も彼女も在宅で仕事ができるからと、それなりに家事も育児もこなしてきた
自負はあるけど、夫婦水入らずの時間でも、彼女が落ち着かないのは僕が悪い。
つい笑ってしまったけど、笑うようなことじゃなかったな。一人で勝手に反省し
ていると、彼女は僕の顔を覗き込んだ。

「まうた、一人の世界に入つてる。二人でゆっくり飲みたいんでしょ？」

給湯器が「お風呂がもうすぐ入る」と予告した。彼女は素早く席を立ち、風呂
場の方へ行つて戻ってきた。今度は椅子にしっかりと腰を下ろした。

「蓋はしっかりと閉まつたから、もう一杯ぐらい飲めるけど？」

彼女はニヤリと笑い、グラスに残ったビールを飲み干した。僕は冷蔵庫の前に
立ち、まだ冷えていない五〇〇ミリ缶を取り出して、食卓に戻った。

初出 令和三年四月三〇日 NXX (旧サイト) にて公開